

# 開放を通じて 日本の再生を図る

国分良成

慶應義塾大学法学部教授  
同大学地域研究センター所長  
アジア戦略会議メンバー



このセッションで考えたのは、日本とアジアの関係を今後どう構築していくのかについて議論を進めることだった。そのためには、まず中国の台頭を軸にアジアで起きているダイナミックな現象についての共通認識を整理し、その上で日本は何ができるのか、つまり日本に問われているものは何かを浮き彫りにしたかった。中国の経済の台頭については、アジアの各国だけではなく、世界が向かい合っている。こうしたアジアのドラスチックな変化に対して、日本の改革、経済の再生という問題は依然、遅れている。

今の日本の状況を考えると、まず自らを改革していく時間的な余裕はなく、こうしたアジアのエネルギーを利用していくしかない。これは中国でもそうだったが、「改革、開放」と言いながら結局のところは自ら改革はできず、「開放」で改革を成し遂げてきた。日本も開放をしながら、アジアや世界の変化の中で生きていくことが重要である。このままでは世界第2の経済大国が沈黙しながら自滅していくことにもなりかねず、ここは真の意味での開国を通じてアジアや世界の中で日本の新たな相対的な位置を見出すしかないと思っている。

このセッションでまず話題になったのは、経済的に動き出した中国の脅威についての議論である。あるパネリストは「中国を脅威と思わない人は精神病院に行ったほうがいい」とまで言っていた。しかし、この脅威の認識は日本、韓国、東南アジアとの間でそれぞれ異なっている。韓国は潜在的に脅威を感じているが、現段階では相対的な優位を持っているため、優位なところから先を進めて中国との差別化を図ろうと考えている。東南アジアの場合は、中国と競合する国があまりにも多いため最も脅威を感じている。その中で中国とASEANが選択したのがFTAであり、もう一緒にやっていかないと生きてはいけないというところがある。

これに対して日本はこれまで達成した経済が見事に落ちかけているという危機感があり、日本の国内問題に問題の大きさを見出す発言がどうしても大きくなる。そうした認識の差がアジアから参加したパネリストの発言にも浮き彫りになっていた。こうした中で大きな問題は結局、アジアの中で日本の役割は何か、ということにある。実際、議論でも日本は自らの将来の奇跡よりもアジアの奇跡のために役割を果たして

ほしいとの意見も出ていた。その裏側には日本の経済力は全くアジアのために使っておらず、自分自身が落ちていくことだけを悲しんでいるという認識がある。つまり、日本全体の政策的な顔が見えてこないということが、日本の全体の相対的な役割、地位の低下をもたらしている。

例えば、ASEAN10ヶ国が中国と一緒にやるといっても経済成長の段階は異なり、その格差は更に拡大する可能性が高く、現実には不協和音が出ている。私自身、中国に行き行って感じるのだが、中国でも内陸の地域開発での協力や経済支援に対してもっと積極的に進められないかという要望はむしろ強まっている。中国自身もまだ多くの問題を抱えていて、現在の成長が外資に依存しているという現実もある。将来的には民主主義の問題など巨大なチャレンジも出てくる。つまりアジアの国はそれぞれに不安定要素を抱えている。

こうした中で、日本はただ落ちていくことを悲しむのではなく、アジアのためにどんな役割が果たせるか、また全体の平準化や分業体制の構築のためにどんな貢献ができるか。むしろリーダーシップを発揮してほしいというのがアジアの声なのだと思う。

それを日本が行うことが、日本全体の再生にも繋がるという、そうした思考のチャンネル、シナリオを日本は持たなくてはならない。残念ながら今の日本はむしろ孤立し、アジアの変化から取り残されているように思える。厳しい言い方をすれば、日本はこのままでは手遅れになるけれども行動するのか、諦めるのか。それぐらいの選択を迫

られており、それを議論の段階からどのように行動に移せるのかに今の日本が、かかっていると考える。

もうひとつの大きな論点は北朝鮮の問題である。セッションでは時間の関係で十分な議論を行うことはできなかったが、日本が北朝鮮問題でどのような立場をとるのかは早晚問われることになる。これは同時に朝鮮半島が今後どうなるのか、そのために日本はどのような関与をするのかも含めてかなり大きな問題を提起している。

北朝鮮の行動は偶発的であり、体制を維持しようという一点に行動の前提があるが、それに惑わされて大局を見失うことは避けなくてはならない。ここで考えるべき第一条件は、朝鮮半島全体を見て、平和的にこの問題をどう解決するかということになる。この点では中国が日本、中国、韓国の北東アジア経済圏の問題で実質的には朝鮮半島で韓国に軸足を置いているということに重要視する必要がある。背景には南北の首脳会談などの動きがあるが、その後、北朝鮮は孤立し、中国は脱北者や核の開発問題などで距離を置き始めている。

こうして考えれば、北東アジアの経済圏構想も朝鮮半島の安定化をめぐる議論として考えられ得るが、そうした戦略的な思考はまだ見当たらない。